



敦賀の祭り・行事

敦賀西町の綱引き(国 重要無形民俗)

1月
西町(現:相生町)
約400年前から続く小正月の行事で、厄年の男性が夷子神・大黒神に扮して町内を練り歩いた後、直径20cm、長さ50mの綱を見物客らも参加して引き合います。東の夷子方が勝てば「大漁」、西の大黒方が勝てば「豊作」と、その年の運勢を占います。

初午祭り(市) 山 稻荷神社

旧暦2月
2月の最初の午の日には伏見稲荷が鎮座した日で、全国の多くの稲荷神社の祭日となっています。山の初午祭りは豊作を感謝し、折る祭りで、ヒビ退治の伝説にちなんで晴れ簾姿のヒミズグクが8人のゴクカキが持つお供えの下を歩いて神社まで行列します。

野坂だのせ祭り(県) 野坂 野坂神社

旧暦1月
豊作や農作業の順調なことを願う行予祈の芸能です。素裸という衣装を身に着けた6人の男衆が、チサという木の棒を鎖に見立てて持ち太鼓をたたきながら踊る(田打ち)、束ねた青葉彩を甲苗、床を田面に見立てて苗を植える様子を踊る「田植え」を行います。

沓見御田植祭(県) 沓見 信濃斎神社(男宮) 久豆弥神社(女宮)

5月
稲の無事なる成長と豊作を祈って行われる行事で、男宮・女宮それぞれに「御常さん」を中心とした行列を仕立て「ヤーホーハイヤ、来年も当屋、再来年も当屋」と氣勢を上げ神社に渡御します。神社の拝殿では、中世的な芸能である「王の舞」「獅子舞」「田植え歌」などを奉納します。

氣比神社の春祭り・秋祭り(市) 刀根 氣比神社

4月
12月
春祭りでは、むしろの旗を先頭に、手には藁束と杖を持ち、桂の若枝を結んだ冠をかぶった子どもたちが、区内を練り歩きます。秋祭りは「まやあけ」・霜月祭りともいわれ、音頭に合わせて威勢よく棒状で餅撒きを行い、これらのお供えを子どもたちが中心となって神社まで行列し奉納します。

相撲甚句(県) 阿曾 利根八幡神社

9月
例祭の中で豊作感謝と神賑行事として宮相撲が奉納され、中入りに、各家に伝わる華やかな化粧まわしを着けた10人の力士が、相撲甚句にあわせて土俵の周りを踊ります。相撲甚句には種やかなテンポの「大踊り」とややテンポの速い「小踊り」があり音頭取りの軽妙な歌にあわせて踊ります。

赤崎獅子舞(県) 赤崎 八幡神社

9月
八幡神社の例祭で奉納される獅子舞です。舞は「鈴の舞」「舞の舞」「蟹拾い」「寝」と続き、「高い山」で最高潮となり、獅子は踊り狂って「千秋楽」となります。踊り手のほかにも道化役も出て面白おかしく賑やかに舞い踊り、笛や太鼓も高度な技術で演じられます。

山車巡行 旧市街地一円

9月
氣比神社の例大祭で曳き出される山車は、室町時代に成立したといわれ、幕末の最盛期には40〜50基が繰り出したと言われていました。敦賀の山車の特徴は、実物の能面や甲冑を付けた等身大の武者人形や山車の舞台を飾る水引幕などの豪華絢爛な装飾です。

すてな踊り(市)

敦賀市内全域にわたって踊り継がれてきた盆踊りで、敦賀まつりには市民総出で踊られています。栗野・市野々地区では、踊りの歌詞に地区の豪農柴田氏の故事を取り入れ、「柴田音頭」として愛好されています。

敦賀市街拡大図

敦賀市全域図

門ヶ崎岬

日本海に突き出た断崖絶壁である門ヶ崎は、花崗岩特有の直方体状の岩が波の浸食や風化によって複雑な幾何学的模様を織り出し、雄壮な景観を造り出しています。岬の先端部分にある高さ30mの2つの石柱と波の浸食によってできた洞窟は海上から見るとあたかも門のような様相をしています。

所在地 敦賀市白木

常宮のオウム岩(県)

常宮神社背後の西方ヶ岳中腹にあるオウム岩は、江戸時代の旅行記「東遊記」にも登場する名所で、高さ約20m、幅30mあります。オウム岩の手前には呼び石の上からものを言うというオウム返しに反響するためオウム岩と呼ばれるようになりました。

所在地 敦賀市常宮

色浜の産小屋(県)

産屋に類する習俗は、全国的に見て瀬戸内諸島・四国・中国・伊豆諸島・北陸等の地方に分布していましたが、敦賀半島では比較的近年まで残っていました。好婦は産気づいたと産小屋に入り、室内に下がっている力綱にすげって出産し、出産後も一定期間は産小屋で生活する慣例でした。色浜の産小屋は元々は集落内の海岸近くにあったものを移築したものです。

所在地 敦賀市色浜

木の芽古道(歴史の道百選)

天長7年(830)に開削され、以降明治初期まで千年以上にわたって敦賀と嶺北方面の往来に利用されてきました。紫式部や道元、織田信長・運如など多くの歴史上の人物が往来しています。峠には通行人の監視や吟味にあたった前川家の居宅が残っています。

所在地 敦賀市新保〜南越前町

深坂古道

古代、敦賀から粟発を運び近江へとぬける道は、敦賀市南部の道分2つに分かれ、湖西(滋賀県高島市)へ向かう七里半越え(塩近江路)と、湖北の塩津(滋賀県長浜市)へ向かう深坂古道(塩津越)がありました。深坂古道は、奈良時代以来の「万葉の道」の一つで、紫式部も幼少期に越前国府(現:越前市)に向かう父・藤原為時に伴われこの道を通りました。

所在地 敦賀市追分〜長浜市寄掛

休岩寺のソテツ(県)

ソテツは九州南部を自生北限域としていますが、東浦海岸は冬でも雪が比較적少くなく気候のおだやかな地域で、ソテツの生育条件に恵まれています。このソテツも高さ5mあまりの老樹巨木で、日本海沿岸地域のソテツとしては生体地理学的に重要なものです。根元から4本に分かれさらに7本に分かれた特徴的な樹形をしています。

所在地 敦賀市大比田30-5

北前船関連遺産

船給馬群
北前船主や船頭たちは、航海の安全などを祈って船体や船名、奉納願文・船頭名などを記載した給馬を市内各所の神社に奉納しています。また、大暴風による沈没の危機から免れた場合などには、感謝の意を込め大波に翻弄される船影を描いた難船給馬等も奉納されました。

北前船図絵馬(市)
文化元年(1804)若狭屋の船頭・治郎兵衛が八幡神社に奉納した給馬です。満帆に風をはらみ疾走する千石船の後方に海運守護の住吉大社を描いています。(八幡神社蔵)

氣比神社祭礼の山車(市)
氣比神社例大祭で市中を巡行する山車の豪華絢爛な装飾は、北前船交易などで繁栄した敦賀の商人の財力と心意気を示しており、有力商人の中には山車を複数所有する稲荷家もありました。

氣比神社宮大鳥居扇額
加賀越前の北前船主・大家七平によって明治34年(1901)に奉納されました。大家家は五大北前船主にも数えられ、敦賀〜ウラジオストク間の定期航路の運航も担っていました。「氣比神宮」の文字は有格川宮威仁親王の染筆によるものです。

所在地 敦賀市常宮11-68

松に蔦紅葉図屏風

北前船船主等により氣比神社に寄進された大屏風。

北前船関連遺産

日本遺産「海を越えた男たちの夢が紡いだ異空間〜北前船寄港地・船主集落〜」
江戸後期から明治時代前期まで、日本海側各港で様々な商品を売り買いする「北前船」による交易が盛んになります。敦賀には北海道のニシンや昆布などが大量にもたらされ港は活気にあふれました。この繁栄は広く敦賀全体に及びました。また市内各所の神社には、航海の無事を願って給馬や石灯笼などが寄進されています。

洲崎の高燈籠(県)

享和2年(1802)、廻船問屋の庄山清兵衛が建立した高さ7.64mの日本海側最古の石積み燈台です。毎夜燈火をともして敦賀湊を出入りする船の目印とされていました。

所在地 敦賀市川崎町2-8

西福寺 御影堂(国)

船中控心得書(市)
北前船主の立石吉兵衛が書き記したもので、船頭や水士の関守すべき掟、船の守り神である船玉明神を崇敬することなど船乗りの心得が記されています。[敦賀郷土博物館蔵]

常宮神社奉納物

常宮神社境内には、航海安全を願う石灯笼や手水鉢などが奉納されています。名の知れた北前船主としては、越前河野浦の右近権左衛門などがいます。

所在地 敦賀市常宮31-11

敦賀のおぼろ昆布製造技術(国登録)

北前船交易によって北海道から敦賀に荷揚げされた海産物のひとつに昆布があります。昆布の一大集積地となった敦賀には、多くの手すきおぼろ昆布職人が集まり、おぼろ昆布の一大産地となっています。

旧大和田銀行本店社屋(国登録)

大和田荘七(初代)は、北前船交易で財を成した商人です。初代荘七がたくわえた財を元手に、2代荘七は大和田銀行を創業します。北前船交易による富が経済の近代化を促しました。
※現在はみなとつるが山車会館の展示施設として活用されています

所在地 敦賀市相生町7-6

旧餅蔵(市)

敦賀湊には北海道から運ばれた海産物等を収納するため、土蔵が軒を連ねていました。戦災や戦後の港湾整備に伴い多くが失われましたが、このうち一棟が武田耕雲斎から水戸天狗党一行が監禁された蔵として、武田耕雲斎等墓の近くに移築されています。

所在地 敦賀市松島町2丁目

足田舟川

北前船で運ばれた荷物を、琵琶湖水運を活用して近江や上方へ輸送するために整備された運河の遺構です。敦賀〜琵琶湖間の運河は伝説を含め平安時代末期から現代まで幾度となく計画されました。文化13年(1816)に江戸幕府と小浜藩によって一部とはいえ唯一完成を見たのがこの舟川です。

所在地 敦賀市足田

粟発舟川の里

舟川の歴史や構造などが学べる展示館。正徳城跡や定広院など周辺散策の拠点にもなります。
所在地 敦賀市足田28-7-1 駐車場:トイ有
開館時間 9:00〜17:00
休 館 日 年末年始(12/29〜1/3)